

見た・聞いた・考えた

― 北欧の福祉・教育を考える旅から ―

〈寄稿〉 全障研事務局長 蘭部 英夫さん

第1回 なぜ？北欧へ

デンマークの首都・コペンハーゲンの北の海岸にルイジアナ現代美術館がある（最近若い子らに人気らしい）。その喫茶室。大きな窓を背にして現地通訳の田口さんがい

る。「デンマークはこの田舎町でも貧富の差を感じないが」と聞くと、「8割が中流。それが政権交代があっても社会福祉政策の変化がないというコンセンサスをささえている」と言う。

「デンマークと比較して、日本のいいところってなんですか？」と無邪気に質問。

「まず食べ物。日本は何でもある。それにうまい。そして四季がある自然。山も四季もない国に比べると懐かしい。それと、あいまいさ」かな。

この国は、いつもどんなことでも、それはどんな意味があるのか？社会にどんな意味

を持つのか？と一事が万事主張しなければ、だからとも認められない」と彼は続けた。窓には小雨と海峡からの風がはげしくぶつかっていた。

北欧への初めての旅は6年遅れの「新婚」旅行だった。3歳になった娘を連れ、せつかくだからと「この指とまれ」で集まった車いす利用



一人で暮らす重度障害者（スウェーデン）のアパートで

者2人を含む18人の仲間といっしょだ。

田口さんの話はそのとき、1993年秋のことだ。それから数えれば8度、北欧の小さな町の障害のある人たちのくらしの現場を仲間たちといっしょに訪ねている。

富山出身のカミサンの高校時代の恩師・村端先生（安曇野は帰省の際の中間地点で、ブルーベリーやそばなどのおいしいおもてなし目当てに2004年から春と夏には欠かさずお邪魔している）からは、「なぜこれほどに北欧にこだわるのか。これまでの視察で見えてきたことをのべよ」と課題が出されていた。

初めて北欧を訪ねたときは、「日本と比べると30年くらい先の差かも」と感じた。日本だってがんばってるし。でも、2度目には「3世代くらい経たないと民主主義は育たないのかも」と感じた。

そして3度目、「マラソンのトップランナーの背中にはもう見えない」。それからは日本との「差」を比較するのではなく、その「違い」の背景、とりわけ「思想」を学ぼうと決めた。すると旅するごとに、

ハツとして、胸にストンと落ちることがある。

たとえば、施設や学校で「[E]」という言葉をよく聞いた。「生活」だけではなく、その延長にある「人生」ととらえるとピタリくる言葉だ。

一人一人の「人生」をどう充実し、ゆたかにしていくか。障害があるうが、それぞれはかけがえのない「人生」の可能性がある。障害があるならば、障害の部分は、みんな

で社会で支える。住まいや教育や医療や仕事や、支えるべきことはハッキリしている。大事なことは、そんなシンプルなことなのだと思うのです。

これから5回の連載です。よろしくおつきあいください。



蘭部英夫さんご夫妻

蘭部さんのプロフィール

1956年群馬生まれ。全国障害者問題研究会全国事務局長、日本障害者協議会（JD）理事・情報通信委員長、東京都東久留米市在住。

著書『北欧 考える旅』全障研出版部など

個人HP <http://www.nginet.or.jp/~kinbe/>



デンマークの基礎学校（小学校）で